ハクサイ（秋まき）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作　　型	━━━━							○	━━━○	━━━	━━━	
主な作業								播種		間引き	追肥	収穫

技　術　体　系

1　作型の特徴

秋の適温期に栽培する最も一般的な作型である。品質が良く、最も収量がとれやすい。しかし、全国的に最も作付けの多い作型で競合するため、早晩種を組み合せて、収穫期幅を広げるとともに品質向上に努めることがポイントとなる。

2　適応地域

平坦地域

3　栽培条件

(1)　温度

生育適温は初期２０℃、結球期１５～１６℃でこの時期の栽培環境に合致している。

(2)　光

秋の生育適期には天候がよいことが多く、日照時間が多く作りやすい作型である。

(3)　土壌条件

ハクサイの根群は繊細で、深く広く分布する。作土層が深く有機質に富む土壌を好む。連作地では苦土やホウ素欠乏が発生しやすいので注意を要する。適 pH6.5 ～ 6.8。

4　経営目標

(1)収　　量	６ t/10a
(2)投下労働時間	１０５時間/10a
(3)所　得　率	４５％
(4)経営規模	１００ａ

（家族労働力２人の場合）

栽　培　技　術

1　品種と特徴

「耐病六十日」

外葉が小さく立性、強勢で播種後 60 日程度で収穫できる極早生種。

「無　双」

生育旺盛で、球頭は包被し、円筒形で播種後 65 ～ 70 日タイプの中早生種。他に「黄ごころ 75」等がある。

「大福 85」

外葉は濃緑で大さく、立性、球は浅く包被する砲弾形で、85 ～ 90 日タイプの中晩生種。他に「黄ごころ 85」等がある。

他に「錦秋」「王将」「金将」等がある。

2　本圃の準備

(1)　土づくり

ハクサイの根群は、深く広く分布するので深耕が必要。完熟唯肥を 10a 当り 2t 以上投入し、有機質に富む土壌をつくる。また、根こぶ病予防のため、アブラナ科野菜との連作はさける。

(2)　施　肥

施　肥　量　　（Ｋｇ／10a）

	N	P_2O_5	K_2O	備　　考
基　肥	15	20	15	追肥は２回に分施する
追　肥	5		5	
全　量	20	20	20	

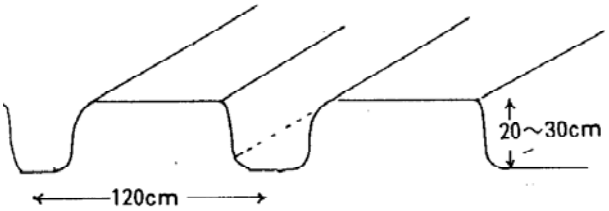
基肥は、播種 7 日前に全面施用し、深耕しておく。施肥量は、土壌診断結果により加減する。窒素過多は、ゴマ症、心腐れ等の生理障害が発生しやすい。ホウ素欠が発生しやすいのでホウ素入肥料を使用す

る。

(3) 畦立て

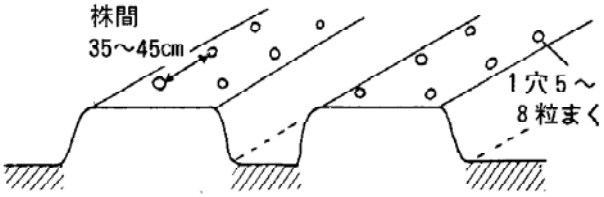
播種 2 ～ 3 日前に畦立てする。

畦幅は、120cm とし、排水の悪い圃場は高畦とする。畑地の乾燥しやすい圃場は、平畦とする。



３　播　種

播種は、2 条まきとし、株間 35 ～ 45cm（晩生種ほど株間を広くとる）とし、1 穴 5 ～ 6 粒まき軽く覆土し鎮圧する。種子量は 10a 当り 2 dℓ使用する。



４　本圃の管理

(1) 潅　水

乾燥にきわめて弱いため､生育ステージに合わせ、定期的に潅水を行う。生育初期の乾燥は葉の分化、伸長が抑えられ、後期の乾操は、結球、肥大不足となる。逆に、高温期の過湿は軟腐病を誘発するので、排水に注意する。

(2) 間引き

徒長を防ぐため本葉 1 枚時に実施する。除去する株は、子葉の奇形、葉色の濃いもの、異種株を優先して間引く。

2 回目：本葉 2 ～ 3 枚時で、株が極端に大きいものや、小さいものを優先して間引く。

最終間引き：本葉 5 ～ 6 枚期で、健全で生育の揃ったものを残す。

(3)　追肥、中耕

間引きの後に、それぞれ N、K_2O 成分で 2 ～ 3kg を追肥し、除草を兼ね中耕を行う。中耕が遅れると根を切り生育を遅らすことになるので早めに行う。

(4)　結束

1 ～ 2 月の厳寒期収穫をねらう場合は 12 月中下旬ごろに結束を行う。結束前に薬剤散布を行い害虫防除を行っておくとともに外葉が傷んでない状態で結束する。

５ 収　穫

収穫期は球のしまり具合で決まる。

ハクサイの頭を押し、かたくしまっていれば収穫適期である。